

日本語文学系設置20週年を迎えて

蔡 茂 豊

1972年5月東呉大学は、教育部台（61）高字第10493号の公文をもって外文系東方語文組を設置した。今年で20週年を迎えることになる。20週年とは、人間でたとえると、成人式を迎える年となる。一人前の大人となったわけである。式典を挙げ、何かの記念行事をせねばとも思うが、それはともかく、先ず本誌にここ20年間の歩みを回顧しつつ筆を進めていきたい。

実は今日、日本語文学系（畧称日文系）と呼ばれているこの学科は、色いろと名称を変えながら今日に至ったのである。それを挙げると、

(1)外文系東方語文組（東語組）——1972年

(2)東方語文学系（東語系）——1975年

(3)日語系 ——1981年

(4)日本語文学系（日文系）——1984年

上記の名称からして分かる通り色いろと遍歴したものである。しかし誰ぞ知るや、改称にはそれなりの理由と背景があり、どうしようもないといったところである。

まず「東方語文」云云だが、一体何を指すのか、分からないという新入生がいた。新入生は統一テストの点数によって振り分けられるので、蓋を開けて見ないまではどの学系に配られるか知る由もない。それが幸か不幸か、東方語文組に自分の名前が載っているのを見て始めて「東方語文」はいかなる語文であるかを調

べ、やっそこ日本語文であることを知るといったようなものである。

日本語文なら、初めから日本語文と、正々堂々名乗ればいいのに、東方語文と名付けてごまかす(?)には、それなりの理由があろう。はっきり言って、日本という国を正視したくないからであり、坊主憎けりゃ袈裟まで憎み、日本語文も度外視されたまでのことである。

「東方語文組」は1963年文化学院（現在文化大学）に戦後初めて設置された。1945年、台湾が中国に返還されてから18年も立っている。戦後間もないあいだに、台湾で二二八事件といった政治抗争が起こり、至るところで台湾人が日本語を口にするので、政府当局にとって、台湾人ほど下劣な奴はないと思ったのであろう。その台湾人が口にする日本語まで憎まれる所以がここにあるわけである。

日本を憎み、日本語文までそば杖をくらったのにもかかわらず、政府当局が日本語を専攻する学科を「東方語文」の名称で設置させたことの裏には、文化学院の創立者張其昀氏の政治的パワーによるものだと、筆者は見る。

「東方語文組」は上記の背景によってスタートした。そして1966年に淡江文理学院（現在淡江大学）、1969年に輔仁大学、そして1972年に東呉大学と、それぞれ「東方語文学系」「東方語文組」が設置されたのである。

名称はともかくとして、実際に日本語文が一学科として大学に設置されたのだから我慢できよう。それから、上記各日本語学科の設置年月を見ると、三年毎になっている。順調に行けば、日本語学科はいつかは台湾のあらゆる大学に設置されると思ったのは筆者だけではなかろう。

豈計らんや、大学入試合格者が8月に発表、10月の学生登録を前に控えた9月29日、日本の田中内閣が中共政権との国交正常化を公表し、台湾と断交したのである。双方の駐在大使館は引き揚げ、日本航空が休航し、日本との往来が一瞬先暗闇となった。

台湾と断交した田中内閣に憤りを感じた台湾の大学生は群をなし、デモ行進中に「日本語を使うな！日本製品を買うな！」とシュプレヒコールをくりかえした。

この時ほど身の狭さを感じた日本語教師は筆者だけではないはずである。学生登録に60名の定員が40余名しか集まらなかった。このような非常時期に「日本語文組」でなくして、「東方語文組」でよかったと思ったのは皮肉なことである。

東呉大学外文系東方語文組は不幸な時に呱呱の声をあげたものである。学校当局もさぞかし拙い時期に拙い学科を設けたものだと悔んだに違いない。道理で筆者が赴任したとき、読本の先生一人に会話の先生一人、計2名しかなかった学科であった。

筆者は不運なときに赴任したものだ、と思う者もいよう。20週年を迎えた今日、振り返ってみて、よくもその時期に赴任し、またよくもこらえ抜いてきたものだと感無量にたえないのである。

筆者が赴任したのは年が明けた1月15日である。赴任といっても実は前記読本の先生である柯振華氏が秘書として、新しく設けられた亜東関係協会東京弁事処（現在駐日経済文化代表処と改称）に赴任されるので、邱創寿氏を通して筆者が請われて、代講に來ただけに過ぎない。第一学期が終わろうとし、残りわずか二週間ではなかったかと思う。

そして初日、外文系主任教授の楊其銑氏に期せずして会い、三日目、学長室から呼び出しがあり、今はなき元学長端木愷氏から東方語文組初代の主任になってくれないかとの誘いを受けた。その誘いに応じるにはそれなりの勇気を必要とした。何故なら、官立の海洋学院（現在国立海洋大学）から私学に籍を移す者は今の時代でもさほど多くない。そこでひとまず非常勤の組主任という名義で承諾し、やってみることにした。4年目に、外文系の三組（英語・ドイツ語・日本語）がそれぞれ独立し、東方語文学系に改称した。筆者も始めて正式に籍を移し、初代の系主任をつとめることになった。

初めの3年間、非常勤ではあったが、筆者は全力投球した。済まない話だが官立の大学には全力投球をしてくれる日本語の教官を必要としないから自由行動がとれた。どっちが専属でどっちがかけ持ちか区別がつかなかったほど、筆者は東

方語文組に尽くした。むろん、それなりの理由がある。1965年、文化学院に招聘されたが自分の理想が実現されず、気が塞がっていた。その後、官立の海洋学院に籍を移したものの、日本語専攻の学科がないので、張切れなかった。東呉大学では、新しい学科で、精神的に負担がなく、思う存分自分の考えで動くことができたからである。

日本との断交後、日本語の学習ブームは低下し、日本関係はあらゆる面において前途暗しといったところだが、台湾と日本とは歴史的、地縁的に見て、「断交」できる状態ではない、否！政治的に断交しても、宣戦の相手国でない以上、簡単に手が切れる間柄ではないと判断し、暫くの辛棒だ！このあいまを利用してしっかり日本語を身につけ、将来に備えるのだと学生諸君にハッパをかけた。筆者の日本語教育に対する熱狂さが伝わったのか、学生諸君は黙ってついてきてくれた。そして1976年、目出度く第一期生を社会に送り出したのである。

社会に送り出すということは、つまり四年間につくった製品が果たして品質の面で受け入れられるか、といった検証を指す。幸いに実力の面ではよその大学に比べてひけを取らないということが確認できた。初心を失わずに頑張り続け、筆者は1982年にバトンを蔡華山氏に渡した。組主任3年に系主任8年計11年学科を運営してきたわけである。10年を一つの区切りとすれば、初めの十年間に、学科の基礎づくりは一応完成したと見做してよかろう。交流協会奨学金合格者の多数を占めた「東呉東語系」の名はみんなの注目を引いた。この十年間の基礎を打ち立てたのはむろん筆者一人の力によるものではない。蔡華山氏を始め、林錦川、頼華光、伊藤六夫、尾久幸子等先生が一丸となって学生指導に当たったのである。

任期が切れる前の1981年、筆者は東方語文学系を日語系に改称することに成功した。むろん戦後の台湾では初めて使われた名称であり、今まで歪まれていた名を改正しただけのことである。日語系とは「日本語学科」の意味であり、四年間学生諸君に、五十音から日本語をマスターさせるといった学科の意味に外ならない。実際に教えるもの、学んだものも殆ど「日本語」から余り掛り離れていな

い。当時の「必修課程」を掲げると次の通りである。

日語発音 2単位（以下同）

日語会話 12～18

初級日語 6

日語語法 8

日語翻訳 4～8

中級日語 6

高級日語 4

日本名著選読 8

現代日本応用文 4

日本文学史 6

日語修辞学 4

日文習作 6

中国文学史 6

中国文学欣賞及習作 4

合計74～86単位（1978年度新しく修訂された必修課程表による）

4年間の卒業単位数が128単位の中、専攻科目として挙げられた「必修課程」の殆どが日本語である。日本語学科を「日語系」と称するのが正しいと考えた結果、教育部に申請し、許可をとったわけである。

それが1984年、全国の日本語学科の名称が「日本語文学系」に統一された。いいかえれば、東呉大学は「日語系」、他の大学は「東方語文学系」、これでは拙いと思ったのであろう。教育部の措置に納得が行かないでもない。

蔡華山氏が1984年、開南高等商工学校の校長に転出し、林錦川氏がそのあとを継ぎ（1984～1989）、それから陳山龍氏（1989～1991）蘇文郎氏（1991～）へとバトンが渡された。後半の10年間上記諸氏の努力により、東呉日本語文学系は一段と磨きがかかり、旭日東昇の勢いでの上がってきたことは誰もが認める

ところである。

もっとも後半の10年間、多数の教師がスタッフの一員として加入し力を合わせて今日の日本語学科を強化した。黄国彦、鍾芳珍、陳永基、黄錦容、陳淑娟、高橋正己、莊隆福、賴錦雀、林文賢、李翠芳諸氏である。定員の関係で専属として迎えられず非常勤として力を出して下さった教官も多々ある。日本語学科は大勢の先生によって始めて今日あるのだということを再三記したい。

この20年間、筆者の願いは一步一步実現されたといっている。台湾の日本語教育を普及するため、まず日本語教師の養成に力を入れてきた。前半の10年間、卒業生を日本に送り、そして学成りた暁に呼び戻し、後輩の養成に投入させた。後半の10年間、学科運営をかつての教え子たちに渡し、筆者は1980年に日本文化研究所を設置し、教師養成の修士課程をスタートさせ、1991年に博士課程を発足した。台湾における日本語教育の体系を私たちが主体となって作り上げる時期だとの理念に基いてである。

むろん私の考えに共鳴する者がどれだけいるか知る由もない。そのかわり、日が立つにつれ、いつか理解者が現われ、バトンを受け継いでくれる日がくるのを信じている。

学科主任蘇文郎氏は第一期の出身者であり、学科の多くの教師がまたその後輩である。これからみな一致団結して、「和」を重んじ、日本語教育のためにそれぞれの専門を生かして活躍してもらいたい。